

学習の個別化による グループ学習への強化： ゼミでの Teams の使用経験に基づいて

経済学部 教授 陳 韻如

1. 概要

専門演習（以下、『演習』と略称）はそれぞれの学年に 18 人程度の学生が在籍し、演習Ⅰ・Ⅱではグループ研究、演習Ⅲ・Ⅳでは個人の卒論研究を中心に取り組んでいる。演習の内容や運営方法、目標、ゼミ生同士の協働形態は異なるが、例年、グループ研究では自発的に取り組む学生が少数にとどまりグループ学習の個人学習への波及効果が限定されるという課題がある。そして、学生は個人学習が十分とはいえないまま卒論研究に取り組んだ結果、卒論のクオリティーも満足できるレベルに達していない。グループ学習から個人学習へ、個人の学習への主体性を強化することはゼミ運営の目標の一つであるが、上述した現状からすれば目標に必ずしも十分に達成したとは言えない。

これまでグループ学習や自主学習を促すために有効だと思われるグループワークをゼミに取り入れゼミ生の仲間意識の形成や協働しやすい環境づくりに力を入れてきた。しかし、これらの工夫だけでは学生全体の自主学習を十分に促すことができない。そもそも、個人間の能力や身に付けた専門知識の質量にギャップが存在しているのは当然のことだが、グループ学習を通して個人学習がなかなか全体に浸透しない最も直接の原因は個人の学習モチベーションを維持しにくい点にあると思われる（グループワークによってモチベーションが減退してしまったケースもある）。このようなゼミの課題を解決するために、個人の学習モチベーションを維持し学習の個別化を強化する必要があると感じたが、コロナ禍で ICT ツールの使用が浸透したことによってゼミ

ミ課題の改善の糸口を見出だした。そのため、後述した内容はゼミ運営に ICT ツールを導入してからの試行錯誤の結果に過ぎないということを理解していただきたい。

2. ICT ツールの利用と試行錯誤

コロナ禍をきっかけにオンライン学習の環境整備が急速に進んでいるなか、ゼミの運営に ICT ツールの Microsoft Teams（以下、『Teams』）を導入した。Teams のメイン機能はコミュニケーション支援にあるが、ゼミでは資料の共有とゼミ時間外の交流などの機能を中心に使用している。以下では演習別に Teams の利用方法を説明する。まず、演習Ⅰ・Ⅱの利用方法は以下の通りである。

- ①教員から研究関連の資料を共有する。テーマごとのコミュニティが設定できる点を利用し、全体と研究グループ別にチャンネルを設定する。ゼミの運営に関する方針・目標、研究方法、過去のゼミで行われた研究資料、参考書など、手本となる参考資料を教員から「ゼミ全体」チャンネルに提供する。
- ②学生に情報の共有を促す。各研究グループのチャンネルで共有する内容はサブゼミの議事録（簡単なメモや写メも可）、ゼミでの発表資料、研究関連データ、スケジュールを必需アイテムとして共有を徹底している。
- ③Teams 上の対話・相互フィードバックを推奨する。それぞれの投稿に対し、疑問に思うこと、良いと思うことを率直にリアクション、またコメントしあうように指導する。
- ④資料の共同編集を推奨する。発表資料や発表原稿などは完成してから共有するのではなく、叩き台の段階から共同で作業するように指導する。

演習Ⅲ・Ⅳになると、以上の Teams 利用方法に加え、卒論マニュアル、課題提出、卒論進捗状況報告、卒論提出といったチャンネルを追加した。これらのチャンネルは、卒論の作法・良い論文の手本の提示から、研究倫理の

遵守、課題による学習効果の確認、スケジュール管理への督促などの目的で使用している。

3. 学習の個別化とグループ学習への影響

Teams の使用に合わせてゼミ運営の仕方も改善を試みた。コロナ禍以前のゼミは相互学習と個人学習の工夫を研究グループに任せ、教員の研究グループへの指導やコミュニケーションをとる時間帯は正規ゼミ（まれにサブゼミ）に限られたため、ゼミ時間外の指導はグループリーダーやコアメンバーに対するものになりやすい。その結果、グループ研究の成果は個人学習より重視される、リーダーや能力の高い学生のみ指導されると誤解されがちである。また、欠席者へのフォローが難しいため、学生は情報が不十分な状態に置かれると学習へのモチベーションを維持できなくなりグループ学習からフェードアウトしてしまう所以である。ゼミの課題の解決に向けて、Teams の導入において意識した取り組みと効果は以下に挙げる（図1を参照）。

(1) 議事録、資料等の徹底共有により個別学習のための基盤を作る。これによりゼミ時間外の学習、活動等に参加できなかった学生へのフォローは容易になったため、学生の学習モチベーションの維持が可能になった。特に、就職活動で欠席した4回生はゼミ時間外学習によって研究の遅れを回避できた。

(2) 学生活動の可視化を図り、個人学習への自覚を促す。研究の進捗状況は Teams で把握できるだけでなく、投稿者と投稿頻度も表示されるため、学生のグループや研究への貢献度・コミットメントを測る客観的指標を得られる。学生もアウトプットを意識して自発的に学習やグループ研究に取り組むようになった。Teams での投稿やフィードバックの活発化によりグループ内の交流の質と量も改善でき、グループ学習の成果を上げやすくなる。

(3) 学習プロセスの共有を重視する。Teams

での分業・共同作業の経験を通じて学生にグループ内の立ち位置や自らの得意分野を探索してもらおう。学生のポテンシャルや自己肯定感を引き出すことにより、個人学習へのさらなる意欲を高めることができた。

(4) 教員は Teams での共有・コミュニケーションを活発化させるために、手本を用意し、投稿へフィードバックすることを心掛けた。Teams によるゼミ時間外のグループ指導や個人学習へのフォローは個人のモチベーションの維持と向上にもつながった。

以上の取り組みは結果的にグループ内の交流を高め、卒論研究においても学生は自発的に卒論勉強会を開催したこともあった。また、学生の学習意欲や研究能力の向上により卒論の質が高まったことも実感した。

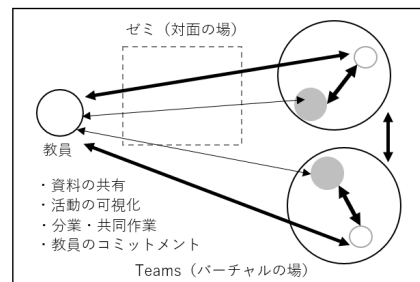


図1 Teams 導入後の学習構造（太線は交流増を示す）

4. 今後の展望

今回の教育実践優秀賞のテーマである「学生の授業時間外学習を促す授業改革の試み」に推薦してくださったが、上述した試みはコロナ禍で導入されたオンライン授業の試行錯誤によってゼミ課題の改善の可能性を見出したに過ぎない。

ゼミ運営における ICT ツールの使用は学習の個別化を強化し、従来の課題である個人モチベーションを維持し、グループ学習から個人学習への波及効果を向上させることが確認できた。さらに、今後学生によるゼミの自主運営、形を取らないゼミの可能性も気付かされた。今後、ICT ツールが学習の個別化を促す利点を活かしつつ、多様化社会に向けて新しい大学教育の価値を創っていくために引き続き改善に取り組んでいきたい。